

# 哲学の四段階と斯学の現況

Franz Brentano 著

池上 鎌三 訳

## 凡例

本PDFは哲学論叢27ブレンターノ著池上鎌三訳『哲学の四段階と斯学の現況』（岩波書店1930）を底本とする。

- ・ 底本における漢字は新漢字に改め、旧仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。
- ・ 送り仮名も、いくつか現代的に変えた。「就て」を「就いて」と、「為め・丈け・猶お・尚お」はママ。
- ・ 底本に於ける平仮名・カナの踊り字（ゝゞく）は、解消した。
- ・ 人名・地名のカタカナ表記を幾つかを現代的に改めた、一覧を巻末に。
- ・ 底本に於ける圈点は、本文は明朝体の太文字、人名はゴシック体にした。
- ・ ルビは、底本にわずかにあるが、作成者の付したものと区別はしない。
- ・ □ は、小引にあるように、訳者の加えたもの。
- ・ 著書名が青字斜体であるのはネットに公開されていることを示す。
- ・ □ 及び頁左の脚注は、すべて作成者のものである。

## 訳者小引

一、此の論文は Franz Brentano, *Die vier Phasen der Philosophie und ihr augenblicklicher Stand*, 1895 の翻訳である。原文は現在同名を附した彼の論文集 (*Philosophische Bibliothek* 第一九五篇) の巻頭に収められて居る。

一、此の論文の主張する哲学史観は——恐らくはすべての歴史観がそうである様に——多くの批評を免れ得ないであろう。けれ共吾々は此の論文から——これも亦すべての歴史観に於てそうであろう様に——著者自身の組織的立場とその背景とを読み取る事ができる。或いは吾々の興味は寧ろより多く此の点に在るかも知れない。

一、此の論文の由来は原著者序に明らかである。

一、著者の閼歴に就いては本論叢第八篇訳者序に記されて居る故此処には省略する。

一、「〔 〕」内は訳者の附した蛇足的注である。

一、原文にある献辞は本訳書では省略した。

昭和五年四月

池上 鎌三

## 序

私が此処に発表するものは、一八九四年十一月二十八日『ウィーン学芸協会』に於て試みた講演である。

私は、該協会の出版に係る著書に關聯して集会の席上話しをする様にとの依頼を受けて居た。それでH・ロルムの著書『根柢なき最善觀』を讀了した人は、本講演中この書の如何なる本質的要素に対しても批評のあるのを見て實際満足されるであらう。けれ共又本講演は、未だこの書を讀まぬ人に取つても、未讀なるが故によりわかり難いという事はないであらう。本講演の内容は獨立して居るのである。

本講演に於ては、現代の最も著しい哲学上の関心事に觸れて居る。本講演の哲学史觀は、多くの人々を新奇なものとして驚かすかも知れない。けれ共、私自身に取つてはそれは、多年來確定のものであり、又二十余年来私並びに私の二三の弟子達が、大学に於ける哲学史講義の基礎として來たものでもある。それ等の講義は先入見に反するものであるという事、及び此の先入見は最初の衝突に依つて退却するには恐らく余りに力強いであらうという事は、私は思違えては居ない積りである。にも拘わらず<sup>か</sup>私は、此処に提示した事実と考究とは、思索しつつそれを辿る人に対しては、必ず印象を残さずにはおくまい、と信じて居る。

私はできる限りすべての理解の難を除く事に骨折った。末尾に附した短い注は、特に、比較的歴史に熟さぬ人々に対し編年史的順序を明らかにせんと意図に出でたものである。

尚お注意して置き度<sup>た</sup>い事は、人若し、私の欲する所が、哲学の其の促進者としては私の尊敬し難い様なそういう劃期的思想家達から、尊敬し難きが故に彼等の異常に高い天分の幾分をでも減じようとするに在る、と信じるならば、それは全然私を誤解するものである、という事である。ヘーゲルの体系の学的価値に対する評価の点では、私はショーペンハウエルに同意する。が、彼の精神力を軽蔑する点では、私はショーペンハウエルに賛成するを得ない。斯くて又実に特に、私がカントを扱う際、人々は此の異常なる精神の所有者に関する私の真意を誤解せぬ様に希望する。自然科学に対するカントの業績は、——<sup>あたか</sup>恰も数学に対するプロクロスの如き人の業績に於ける如く〔<sup>プロクロスにはユークリッド幾何学の注釈書がある。けれど、共それは、彼の新プラトン主義的哲学体系には関係がない。</sup>〕——彼の哲学体系に関して言われる事柄とは、素々全く無関係で居るものである。

一八九五年一月十八日、ウィーン、

フランツ・ブレンターノ

## 哲学の四段階と斯学の現状

尊敬する会衆諸君！

一 ヒエロニムス・ロルムは、その著『根拠なき最善観』(一)を著わす事に依つて、最も崇高な哲学問題を取扱える一書を吾々に寄与した。ウィーン学芸協会は此の書を刊行して今日私が此の書に関して諸君に御話しする様に要求して居る。

扱<sup>さて</sup>、孤立した哲学講演というものは——ほんとの専門家達の間<sup>に</sup>於てでない限り——やりにくいのが常である。實際は多様な關係を以て他と結合して居る所のものが、分離されるからである。一般の興味を最も強く喚起するものは、一般の人に依つて最もよく理解せられ得る如きものではない。何者<sup>なんとなれば</sup>一般の人の最もよく理解し得るのは明らかに初歩的な諸問題であるからである。所が初歩的問題に於ては、考察は地味にして且つ無味乾燥である。斯かる初歩的問題が遠く影響してやがては最も崇高なものに触れるという事は、人の直ちには全く予想しない事である。それで若し長くこれ等の初歩的問題の研究に留まるならば、人は弊害の最悪なるものに墮するであろう、即ち人は倦怠に陥るであろう。今回は私も、此の種の初歩的な対象の最も簡単なものを捕える事が全くできなかったのであつた。というのは、ロルムの此の著書を顧るがために、私の選択すべ

かりし主題の範圍が若干限局されたからである。

以上にも拘わらず私は諸君の招聘に應じた。当学芸協會は一個真面目なる哲学書を公刊して、哲学への興味は大部分の範圍の人々に於て消え失せてしまったと公言する人達に對して甚だ美事に反証を与えて居る。(三)これは称讃と感謝とを値する行為である。(四)

二 ロルムの斯書は著しい特徴を有つて居る。著者の寛広な理解力は彼の此の著書の裡によく働いて居り、且つ斯書は或いは警拔示唆的な、又或いは犀利明敏な評語に富んで居る。というのは、ロルムは他者に對する批評にも及び、又時事的出来事、並びに今日の哲学状態を導いた歴史的發展、をも丁寧しやうじんに恕説批判じよせつひはんして居る【“verweilt viel bei der Würdigung...”】からである。

彼自らの主張は獨創を欠いて居ない。それどころか寧ろ私は主觀的特性が余りにも強く現れ過ぎて居る為め、彼自らの主張の一般的意義が危くされると言い度い位である。とはいへ併し同時に又ロルムは、自身が本質的には眞の時代の兒なる事を証示して居る。主題の選択が既に最惡觀的な時代思潮を暗示して居る。またそれと同じく此の著者の裡には現代の特性なるカントに對する高き畏敬がよく現れて居る。加しかのみならず之の場合にも亦、今や一般に行われて居る次の如き差別を伴つて居る。即ち『純粹理性批判』は高く評価される、即ちロルムにはすべての将来の研究の安全なる出発点と認められる、それに反して『實踐理性批判』は全然支持し難く「脆弱」なりとし

て拒けられるのである。<sup>しりぞ</sup>

扱、ロルムは、既述の如く、現代哲学及びその前史を明らかにすべく大いに努めて居るのであるが、私は私としても亦此の事を試み度いという誘惑を感じるのである。そして斯く私自身も試みるという事は、ロルムが『根拠なき最善観』と呼んだあの独特の気分を仔細に研究するよりも寧ろ策の得たものと私には思われる。というのは、彼は正に斯書の末尾に於て次の如く言つて居るからである。「唯個々人へのみ……之等の考察は捧げられて居る。之等は団体には、即ち協會の集団理性には向けられない。」<sup>(四)</sup>と。——随つて明らかに、斯書を刊行したウィーン学芸協會自身の集団理性にも亦それ等の考察は向けられて居ないからである。

三 哲学の歴史は学的努力の歴史である。そして此の故に或る点に於ては他諸科学の歴史と類似点を有つ。けれ共又他の点に於ては他諸科学の歴史と異なり、美術史とより多く類比をなす事を示して居る。他諸科学は、苟くもそれが研究されつつある限りは、<sup>いやし</sup>不断的進歩を示して居り、唯静止期のために中絶される事もあるだけであるが、それに反して哲学は、美術の如く、向上発展の時期の外に<sup>はいた</sup>廃頽期——此の時期に於て屢々、健全な稔り<sup>みの</sup>多き時期に比して劃期的な現象がより<sup>すくな</sup>少くはなく、否寧ろより豊富に現れて居る——のある事を示して居る。此の場合に或る合法性が存在する。美術に於ては発展衰退の種々なる時期が、それらの時期に共通なものや類比的



なもののあるのを示して居るのであるが、それと本質的に類比的な仕方では、歐西【abendländische 西洋】の哲学研究を分つ三大時期の歴史が経過して居るのである。

古代、中世、及び精神界に於けるヘーゲルの支配の崩解に至る迄の近世、の各時期に於て、夫々四つの段階が区別される。之等各時期に於ける四段階は、夫々相違があるにも拘わらず、極めて内的に親近なのであつて、実に一度此の点に氣付いた者は、その類似を見誤まる事なき程である。如何に簡単な種類の文化心理学的考察と雖も此の顯著な一致を完全に明らかにする【begrifflich 解でざる】。

私の所謂第一段階は向上発展の全体を包括する。その起るや常に二重の特性を有つ。即ち、第一に澁澁として純粹な理論的興味に依つて特性づけられる——正當にも既にプラトン及びアリストテレスの言つた如く、驚異に依つて人間は先ず哲學的研究へと驅られた——、

次には、猶お種々な仕上を必要とするが併し本質的に自然的である所の方法に依つて特性づけられる。此の方法の助けを藉りて哲學は、一方仮説を完全にし、他方又研究を拡大し新問題を捕えて發展して行く。

第二段階は衰退の第一段をなすものである。之は何時も學的興味の衰微又は不純化に依つて初められる。今や何等か實踐的動機が、研究を主として規定するものとなる。その結果研究は以前

の如く嚴密に且つ良心的には行われない。思想には力と深さとが欠如する。そして深さの代りに或るより大きい広さが獲られ、且つより広い範圍の者が哲学學派の通俗化された諸學說に参与するのであるが、併しそれは本当に學的なる精力の喪失に対して何等眞の補いをなすものではない。かく惡化した狀態に在つてはやがて衰退の第二段をなす所の一種の精神的革命に到達する。これ即ち懷疑の優勢なる時期である。非學的となつた哲學は信賴の価値なきものとなつてしまつた。即ち信賴は斯くの如き學に拒まれるのである。否更に進んで今度は一般に、悟性は何等か確実な認識への能力を拒まれるでないとしても此の能力は極めて貧弱な殘滓ざんしに限られるのである。

併し乍らな、懷疑は人間の渴望を慰いやすものではない。アリストテレスはその『形而上學』の有名な序論に於て言う、「すべての人はその本性上知を得ようと努力する」と。真理への生得しょうとくの希求は、懷疑に依つてその進行を妨げられるにも拘わらず、力強くその進路を開拓して行く。異常に昂たかめられた熱望を以て人は哲學上の独斷說の建設へと復歸する。第一段階が研究方法として採用した所の自然的方法に止まらず更に人は、全く非自然的なる認識方法、全く洞見を欠く原理、天才的なる直接直覺的な力、知的生命の神秘的昂揚等を案出する、そして直ちに又、あらゆる人間的能力を遙かに超越せる最も崇高な真理を所有したという謬想びゅうそうに耽ふけるのである。

最後に述べた所は衰退の最も甚だしいものである。第一の隆盛な研究を導いた所の狀態に対す

る対照は此<sup>こゝ</sup>に於て最も顯著に現れて居る。人はすべてを知つて居ると想うが、併し何ものをも知つて居ない。何者<sup>なんとなれば</sup>、人は、第一段の時期に於て知り且つ痛感して居つた所の一事——即ち何ものをも知らぬという事——をさえも知つて居らぬからである。

四 吾々は先ず古代の時期を瞥見して、その時期の経過が實際如何に上の叙述に一致して居るかを見よう。

ギリシア哲学はイオニアの自然哲学を以て切<sup>マ</sup>まつた【*‘phō an mit der …* はじまつた】。世界の謎に就いての驚異が此の時極めて強い知識欲に点火した事は全く明瞭である。イオニア人中最も偉大な人物の一人なるアナクサゴラスは、その財産の管理を怠り、それを親戚が罵るので、自由に研究に身を捧げる為めその全財産を易々として放擲してしまふ。彼は又、貴族としての政治上優越な地位をも何等利用しようとしなない。彼はその出生都市の監掌を引受ける事を断乎として拒絶する。『天はわが故国、星辰の觀察はわが天職』と彼は言つて居る。

而して之等最古のギリシア人達は、澁<sup>シ</sup>澁として且つ純粹な理論的興味と共に亦自然的な方法をも有つて居る。今日多くの人は——そしてコントすらその様な先入見を助成したのであるが——最初人類は全く事実<sup>じじつ</sup>に反し自然に反する態度を執り、非常に遅れて後始てより適当な研究方法に思い付いたとの意見を抱いて居るから、上述の事は或いは驚かれるかも知れない。けれ共、人類

の幼年期は各個人のそれと類似して居た。ラボアジエ【Lavoisier, 1743-94】<sup>(五)</sup>は、吾々の幼児が生れつき研究の正道を歩んで、如何に速かに<sup>すみや</sup>発見から発見へと進み行くかという事に注意して居る。ビルロートの激賞したテオドール・ゴンベルツ【Gomperz, 1832-1912】<sup>(六)</sup>のギリシア思想家に就いての新著<sup>(七)</sup>を手にする者は、私が古代イオニア人の態度に不当な称讃を払ったのでない事を明確に信ずる事であろう。

斯くの如き興味と斯くの如き方法とを以て今やギリシア哲学は努力向上して行く。仮説は深化され、問題は多岐複雑となり、そして結局広汎な学説体系が建設されるに至る。三百年の後には<sup>(八)</sup>既にアリストテレス哲学の如き学問上の大事業が可能となつた。

アリストテレスは、併し、同時に亦古代哲学の向上期最後の大なる現象でもあつた。彼以後直ちに衰退の第一段が初まる。而も全く明瞭に、理論的興味が実践的興味にその地歩を譲るという仕方で。

五 当時ギリシアの全生活は分解の状態に在つた。民族的宗教への信仰は失せ、古来伝承の国家組織の構成も亦破れてしまつた。理論的要求からではなく、何よりも実践の点で、哲学は救済者として呼びかけられた。

実践一天張り【*einseitig* 一方的】という事を特質とする点に於てストア<sup>(九)</sup>とエピクロス学派<sup>(一〇)</sup>

とは、古代に於ける衰退の此の第一段を代表する両つの学派である。両者の体系に於て三部門の学科が区別された。即ち、倫理学、論理学及び物理学がそれである。併し、論理学と物理学とは倫理学の下婢として、惨めに抑圧された存在を保つて居た。それと同時に倫理学自身はその学問としての意義を減少した。人性に対する一層深い研究なしには、倫理学の課題をも又それを果たすべき道をも明らかにする事を得ない故、蓋しそれは全く自然の数である【*geometrisch* 自然である】。

斯学派はその深さに於て失うと、その代りに広さに於て増加した。エピクロスの徒はプラトン乃至アリストテレスの門下よりも遙かに多数であつた。所がエピクロスはその徒の中に於て、彼の学説を学的に先に進めて行く者は見出さなかつたが、併し一人の天才的詩人（ルクレティクス）【*Lucilius* 頃】（二）を發見した。彼以外には詩人にして未だ嘗てプラトン主義をも、又——後世の「ダンテの」神曲を含めなければ——ペリパトス学派の哲学をも、詩に依つて壯嚴叙述した者はないのである。

六 之について衰退の第二段即ち懷疑の階段が起る。古代史に於て懷疑は二様の形に於て現れて居る。中に就き穩和なるものは新アカデミー（三）のそれである。此の派は即ち、常に唯

i 「物理学」 *Physik* 自然学。

ii 「ペリパトス学派」アリストテレス学派のこと、回廊（ペリパトス）を逍遙しながら講義したと伝えられる。

蓋然性<sup>がいぜん</sup>のみが到達せられ得るのであるとし、随つて絶対的に誤謬に陥るに惧れなき様な【*irruns ausschließ*】<sup>i</sup> 所謂確実性は如何なる問題に於ても到達し得ぬものであると説く。厳密な形の方のは所謂ピュロン主義<sup>i</sup>のそれである。此の学派の名の由来する所のピュロン【*B. C. 360-270* 頃】は既にアレクサンドロス大王の時代に生きて居たが、初めは賛同を獲るよりも寧ろ怪異の念を惹き起した。後年ストア学徒やエピクロス学徒の独断論が頽勢に赴き初めるに至つて事情は變じて来た。アイネシデモス<sup>(一三)</sup>、アグリッパ<sup>(一四)</sup>、セクストス・エンペイリコス<sup>(一五)</sup>、の如き斯方面の最も顕著な人々は此の時期【*A.D. 三世紀頃になる*】に属した。

之等穏和及び厳密な懷疑論者の外に猶お折衷論者<sup>せつちゅう</sup>をも挙げねばならぬ。彼等は種々の学派から己れの好む所に随つて勝手に取捨して来たので彼等自身は何等しつかりした確信にも達する事が出来なかつた。折衷論者の尤なるキケロ【*B. C. 106-43*】<sup>(一六)</sup> は此の故に、本質上新アカデミーの懷疑論者と親近である事を明らかに自覺して居る。

エピクロス学派とストア学派との後期に於て、それ等の学派へも漸次折衷主義の侵入して来た事を想うならば、實際當時は如何にあらゆる哲学が何等かの懷疑的氣分に染んで居た【*angestankt war*】<sup>i</sup> かがわかる。社会の最大部分が懷疑的氣分に囚われて居た。ピラトスの前に立つたイエスが、  
i 「ピュロン主義」懷疑学派とも呼ばれる。三期に分け得るということで、後に挙げている三人は後期に属す。

彼に向つて真理を証す<sup>あか</sup>ために世に來たと声明する時、ピラトスはイエスに向つて懷疑的に次の問を以て反問して居る、「真理、真理とは何ぞや。」

七 併し古代に於て此の懷疑にも亦停止しては居なかつた。却つて反対に、想像され得る限りでの最も力強い反動が繼起した。猶太的<sup>ユダヤ</sup>プラトン学徒<sup>(二七)</sup>、新ピュタゴラス学徒<sup>(二八)</sup>は此の反動に、それ故に又古代哲学の衰退第三段に、属するのである。此の類の中最も際立つて顯著な現象は、併し、叡智的なるものの世界に熱中耽溺<sup>たんでき</sup>した新プラトン学派である。アンモニオス・サッカス【175-234頃】<sup>(二九)</sup>、プロティノス【305頃-370】<sup>(三〇)</sup>、ポルフィリオス【ポルフィリオス、233-305頃】<sup>(三一)</sup>、ヤンブリコス【350-380頃】<sup>(三二)</sup>、プロクロス【411-485頃】<sup>(三三)</sup>、及びその他の多くの人々は、尊敬せられたる、否実に神化せられたる学宗であつた。自然の合法則性に対する認識の欠如の代りに、プロクロス及びその他の人々に依つて三段体系なる技巧的恣意的に作り出された秩序が代用された。

吾々の哲学四段階の法則を古代に關して証明するには、以上を以て十分であらう。

八 吾々は中世に転じよう。

吾々は此處<sup>ここ</sup>にも明らかに同一の光景を見出す。ゲルマンの血を混じた欧西【Abendlandes】の諸民族は、アラビア人と同様に、直ちに極めて強い知識欲に捕えられた事を示して居る。そして又、

彼等にとつて古代思想家中の何人が知識の眞の師たり得るかという事も亦直ちに見出される。スコラ学者達は、ギリシア語を解さなかつたために本質的に甚だ困難になつて居た所のアリストテレスに対する理解を、驚嘆に値いする完全さを以て、比較的短期間に獲得して居る。(三四) アフロディシアスのアレクサンドロスも、シムプリキオス【シンプリキオス、530年頃活躍】も、十三世紀の偉大な宗師トマス・アクィナス【1225頃-1274】(三五)の様に完全には、決してアリストテレスを理解しては居なかつたのである。アリストテレスを理解する事は何等か彼と同じ性質の考え方なしには不可能であつたであらう。此の同一性質の考え方を有つて居たという事実をトマスは、他の著書に於てもであるが、特に政治学上非常に進んで居る有名な書『*De regimine principum*』(『王侯の支配に就いて』)に於て証明したのである。実に人は茲で、更に一層の進歩を期待するを許されなかつたのである！

九 所が！トマスの直後中世哲学の衰退が初まつたのである。純粹な学的興味の衰微と不純化とが衰退へ導いた事は明らかに認められ得べき事である。

中世に於ける哲学的の最も卓越せる支持者はドミニクス派【ドミニコ派】とフランシスクス派【フランシスコ派】との二大乞食団けいぎだんであつた。両者共に景仰けいぎやうされた宗師そうし達を生んだ。けれ共結局ア

i 「乞食団」"Bettelorden"「托鉢乞食」とも。単に乞食団というと十六世紀の八〇年戦争にも居るらしい。



ルベルトウス・マグヌス及びトマス・アキナスに依つて、ドミニクス教団はフランシスクス派のすべての業績を蔽<sup>おほ</sup>うてしまつた。此の事はフランシスクス派の人々に於て尠<sup>すくな</sup>からざる嫉妬を惹き起した。それ故、その時フランシスクス派の人々にとつてドウンス・スコトゥス【1265頃-1308】<sup>(11)</sup> という一個力強く且つ豊饒なる著述家が生じたので、実に彼は彼等に依つて首長として推載<sup>すいたい</sup>されたのであつた。フランシスクス派の人々は皆彼の説に負う所があつた、それは恰<sup>あたか</sup>も、その後直ちにドミニクス派の人々も皆トマスに負う所があつたと同じであつた。真理愛と叡智愛とは唯全くの理窟に墮落し了つた。互に矛盾撞着する事實に就いての觀察と良心的顧慮とは悉く消え失せた。十分に根拠ある駁論も悉く、詭弁的な、否実に無意味に迄なる程の区別癖に依つて、弁証的に仮死の状態に陥らしめられた。ドウンス・スコトゥスは古来伝承の二様の区別法即ち事實的及び概念的のそれに加えて更に、第三の、彼の呼ぶ所に従えば形式的なる、方法を案出した。之は第一よりも小に第二よりも大であるといわれたのであるが、それに於て何等明瞭なものが全然考えられたのではない、が併し此の方法を以てすれば、言葉の上では、それ丈け一層容易に論争されはしたのである。<sup>(12)</sup>

論争<sup>ずき</sup>好は法外に増長した。スコトゥス学徒フランシスクス・マイロー【Franciscus de Mayronis: 1280-1328】は actus Sorbonicus 「ソルボンヌ大論評」を巴里で行はしめた。<sup>(13)</sup> これは真

に残酷な人間虐使であつた。というのは、憐むべき論争者は、昼の小憩しょうけいを除いて十二時間一杯の間、論争を挑むすべての者に対し自説を弁護せねばならなかつたからである。スコラ学は今日迄その無益なる煩瑣はんさの故に罵られて居るのであるが、それは吾々がスコトウス主義時代と呼び得る此の時期に負うて居る事なのである。

一〇 以上述べたのは即ち衰退の第一段であつた。そしてそれは自然と第二段即ち懷疑の階段に移つて行つた。中世に於て此の階段は唯名論に依つて代表されて居る。その革命的にして且つ懷疑的な傾向は既に屢々注意されて來て居る。ウィリアム・オッカム〔1285頃-1349〕(二九)は単に普遍者の実在を排けた【"verwirft nicht bloß die Realität der Universalien"】のみでなく、彼に随したがえばすべて吾々の表象は単に記号であるといわれる、記号とは即ち、煙の火に於ける如く、その指し示す対象とは何等の類似もないものである。最も崇高な問題に關しては彼は次の様に説いて居る。即ち、認識作用を有ち、創造的な、無限なる本体としての神を、理性根拠に依つて認識する事は不可能である。同様に又吾々は、人間の裡に靈魂的にして不死なるものがあるか否かという事は知るを得ない。そして自然的道德も亦存しない。なんとなれば何者、神はその欲する所を命じ得るから。即ち神は、真実と等しく虚偽をも、貞操と等しく姦淫をも、隣人愛護と等しく殺人をも命じ得るであらう、そのみでなく、神は、神自らに対する憎しみをさえ命じ得るであらう、そして若し神の

命ある場合には、その憎しみは功積あるものとなるであろうからである、と。

中世に於ける教会の権威の勢力は非常に有力なものであつて、それは上述の懐疑的諸傾向に対し妨害対抗したのであつた。併し唯名論者達は此の勢力から逃れようと試みた。而も彼等は教会に阿り、我等は教会の教理の真理は毫も侵さないと公言して、その勢力から逃れようと試みたのである。彼等自身教会の教理は神学的には真であると信じて居たであろう、併し乍らそう信ずると同様に断然と、他方では、哲学的には誤りであると公言せざるを得なかつた様である。二つの相反する真理に対する此の差別に依つて、勿論、真理そのものの本質は全然破却された【annulliert】のである。

一一 併し此の懐疑に対抗して中世の末葉頃一つの新しく力強い反動が起きた。

此の時期に於て数多の優れた神秘家が現れた事は人のよく知る所である。マイステル・エックハルト【Eckhart:1260頃-1327/28】<sup>(iii)</sup>、タウレル【Tauler:1300-1361】<sup>(iii)</sup>、ハインリッヒ・スーズ【Seuse:1295-1366】<sup>(iii)</sup>、ヤン・ファン・ロイスブルク【Ruysbroek:1293/94-1381】<sup>(iii)</sup>、並びにルテルの刊行した『独逸神学』の筆者等<sup>(iv)</sup>は他の諸家と共に之に属する。当時の最も顕著な人物としてコンスタンツ会議を司会した偉大なる大学総長ジェルソン<sup>(v)</sup>が神秘家の名を負う居るのは正当である。

而して此の宗教的神秘説の外に吾々は、新しき、從來未聞の、そして全然非自然的なる方法に依つて大胆な翱翔【*kühnen Fluge*】を以て真理の近づき難き尖閣に飛昇しようと欲する哲學的思弁を見出す。私は此処には唯、一方ルルスの徒達と<sup>1</sup>他方有名な独逸のカーディナル【枢機卿】、ニコラウス・クザーヌス【*Nicolaus Cusanus*: 1401-64】とを挙げるに止めておこう。

スペインに於ては十三世紀、既に高尚ではあるが併し惑信的な一人の人物が現れた。即ちライムンドウス・ルルス【*Ramon Llull*: 1232 頃-1315】<sup>(三六)</sup>である。彼は彼の所謂 *Ars magna*（大技術）と呼ぶ新しき論理的方法を案出した。同一中心を有し個々別々に回転し得られる円板の上に、諸々の概念が記されており、之に依つて種々の極めて相異なる組合せが作られる。斯くの如き仕方によつて、自然の秘密が聴き取られようという事は、明らかに考え得られない事である。然るにルルスは、彼自らには天寶<sup>1</sup>と思われた此の発見に就いて至高なるものを約束し、勇ましくも、三位一体、原罪、化肉【*Incarnation* 受肉・化身】、贖罪<sup>1</sup>死等を單なる理性から必然的に証明しようと着手した。此の崎人<sup>1</sup>は彼の同時代人の間では必ずしも多くの弟子を見出さなかつた。併し十四世紀にはルルスの徒はその数を増し、その結果ジェルソンの監督下に巴里大学は明文を以て大技術を弾圧するの止むなきを認めた。ルルスの徒達はその師の著作に対し無限の尊敬を払つて居た。彼等の言う

i 「天寶」、『てんらい』と読むのか？ "Himmel eingegeben schen" 天からの啓示という程の意味であらう。

所に依れば、旧訳は父に、新約は子に、ルルスの説は聖靈に帰せらるべきである。ルルスの説は熟考に依つて研究され得べきものでもなく、又教授に依つて修得され得べきものでもない、それが理解は唯より高き資【*höhere Eingebung*】に依つてのみ到達し得る、というのである。ジオルダーノ・ブルーノ【Bruno:1548-1600】すらルルスの叡智に就いては深い確信を有つて居た如きあの宗教改革期に於ては、猶おルルスの徒の数は非常に多く、その為めパウルス四世は、恰も以前にグレゴリウス十一世のなした如く、此の説を弾劾し、彼の著書を禁止した。

従前の時期と相反して此の時期に於て思弁のなした大胆な飛躍は、ルルスの徒に於けるよりも、矢張等しくジオルダーノ・ブルーノに影響を与えたニコラウス・クザーヌス<sup>(三七)</sup>に於て一層大なるものがある。彼は己れの学説を *Docta ignorantia* 即ち「無知の知」と呼んだ。之を彼は「あらゆる知を超越せる認識作用である所の無知」の意味として居る。彼は之を「概念する事なき直観作用」、「概念せられ得ぬ概念作用」、「思弁」、「直覚」、「神秘的神学」、「第三天国」、「叡智」等々と呼んで居る。最低の認識作用は感官知覚 (*sensus*) である。之より高きものとしては理性 (*ratio*) がある。併し、吾々の遙かに至高なる精神能力即ち知的洞観 (*intellectus*) は之等両者の上に出る。感官は唯肯定に依つてのみ、理性は肯定と否定とに依つて、知的洞観は、それに反して、唯否定に依つてのみ認識する。知的洞観の領域に於ては矛盾律は成立せず、その反対に此の領域に妥当

するのは正に、矛盾律とは相反する原理即ち反对者一致の原理（三九）である。此の超理性的な思维方法に依り大胆極まる仕方、神、被造物、及び神と被造物との化肉に於ける統一、が先天的に構成される。（三九）

之等の最後の独創的な中世の思弁の手段方法を一層詳細なる記載に依つて明瞭にするを得ないのは、私の寔に遺憾とする所である。けれ共、簡単な以上の叙述に依つても、之等中世の思弁が、恰も古代に於ける新ピュタゴラス学派及び新プラトン学派の人々の思弁と等しく、哲学の各三大時期の第四段の私の考える一般特質に應じて居る事を示すには十分であると私は信ずる。それ故吾々は直ちに近世へ移ろう。

一二 第三期はヴェルラムのベーコン【Francis Bacon: 1561-1626】及びデカルト【Descartes: 1596-1650】（四〇）を以て初まる。

此の時期の力強く且つ純粹な知識欲は、既に人々のよく知る所である。が又それと同様に吾々は、此の時期が自然的な方法へと還つて行くのを明らかに見るのである。経験は偉大な教師として尊敬される。今日迄ベーコンの名を聞けば必ずそれと関聯して帰納的研究法が想い起される。同様にデカルトも事実の觀察を念とした。或る人が彼の蔵書の觀覽を申し出た時、デカルトは彼を隣室へ導いた。其処に見られたのは唯一冊の書物でもなく、壁に掛けてある屠殺された犢（こやうし）であ

った。之を彼は生理学的心理学の研究の爲めに解剖したのであった。彼は言った、「あれが私の知識を引き出す蔵書です」と。

彼直後の後継者達は依然経験の方法に忠実であつた。ロツク<sup>(四)</sup>は此の経験的方法で多くの優れた事を爲した。ライプニッツ<sup>[1646-1716]</sup><sup>(四)</sup>も亦猶お多くの優れた心理学上の洞察を行つた。唯彼はその活動力を分裂させた爲め、その天才力の唯極めて小部分のみを哲学に注ぎ得たにすぎなかつた。

二三 併し乍らその後直ぐ様、恰も古代に於ける遙かに長期の向上発展の後に然うであつた如く、一つの混乱が現れる。

その時代の状態は実に、ギリシアの廢頽初期のそれと、多くの点に於て類似して居る。民族的宗教は心情の上に最早旧の如き力を及ぼさず、政治の領域に於ても亦あらゆる伝承的なものは動搖に陥つた。再び哲学は到處に救済手段を給さねばならなかつた。斯くて純粹な理論的興味は再び実践的興味に依つて駆逐された。そこで古代に於けると同様な結果が生じた。哲学は淺薄になり、そして極めて多数の参与者があつたにも拘わらず、学的意義という点では獲る所ではなく唯失うに過ぎなかつた。

所謂フランスの及び所謂ドイツの啓蒙は、そのあらゆる内的相違にも拘わらず両者共に上述の

事に対する例証をなして居る。前者は言わばロック哲学の浅薄化<sup>(四三)</sup>であり、後者はライプニ

ッツ哲学の浅薄化<sup>(四四)</sup>であるとする事ができるであろう。ヒューム<sup>(四五)</sup>は、ロックの諸著は

最早本来的には殆々と読まれず、唯表面的な哲学著述家のみが大衆を支配した事を注意して居る。

一四 斯くて衰微の第一段は出現した。而してその後直ちに第二段即ち懷疑の階段が継起した。

哲学の第三の大時期に於ける此の階段を主として代表するもの<sup>(四六)</sup>は即ちデイビット・ヒュー

ム<sup>[Hume: 1711-1776]</sup><sup>(四七)</sup>である。此の事は余りにもよく知られた事であるから、彼の学説を更

に深く論ずる事に依つてそれを基礎づける必要はないであろう。又彼の懷疑の針は<sup>ただ</sup>彼の故国

に於て許り<sup>ばかり</sup>でなく、今やイギリスと並んで哲学的思索の培養に対する最も豊かな沃土となつたド

イツに於ても亦感知されるに至つた事も人の知る所である。カントは卒直に、デイビット・ヒュ

ームに依つてその独断の仮睡<sup>かすい</sup>から喚び醒まされたと言つて居る。

一五 所が！此の懷疑について再び極めて力強い反動が起きて来る。此の反動は未曾有<sup>みぞう</sup>にして

且つ非自然的な手段に依つて、認識を救い出そうと、加<sup>しかのみならず</sup>之更に進んでは、認識を極端に拡張し

ようと企てるものである。

イギリスに於て此の反動は、今日ドイツ人の間に於ては余りにも注意されなすぎるのを常とする所の所謂スコットランド学派なるものに依つて起きた。斯学派の創始者トーマス・リード



【Reid:1710-1796】<sup>(四八)</sup> は主張して言う、万人の意識中には若干の本源的判断が存するのであって、之は吾々に明らかにわからなく共、吾々は之を確信して居るのである、と。彼は之を“common sense”即ち「常識」と呼んだ。吾々は之を思い違える事はあり得る、然しそれにも拘わらず、吾々は之を信ぜざるを得ず、且つ又此の上に学を築く事ができる、と言う。斯くて——併し唯斯くてのみ——懷疑説は超克せられるのである、と言うのである。

ヒュームの懷疑に対し知識を救う事を自らの使命としたのは、ドイツに於てはカント【Kant:1724-1804】<sup>(四九)</sup> であつた。而して彼の態度は、本質的にはリードに類似して居た。カントの主張する所に依れば、科学はその根柢に、彼が先天綜合認識と呼ぶ所の若干の原理を要求する。彼が茲に意味する所を仔細に見れば、彼の言つて居るのは、明瞭ではないが併し吾々に対し前<sup>まえ</sup>以て確立して居るとせられる所の命題の事であり、随つてリードの要約して“common sense”と呼ぶ判断の有する——とリードの称する——如き特性を有てる若干の本源的判断の事である、という事がわかる。

所で併しカント特有のものがある。リードは盲目的な先入見の上に知識を建設しようとする要求の明らかな不合理を少しも矯飾<sup>きようしよく</sup>【zu beschönigen】しようとしなない。然るにそれに反しカントは、明らかに甚だ不合理な態度を是認するための手段を講じて居る。而して此の事は彼を導いて斯く

の如き盲目的な先入見を恃む事が、一つの予想の下に於ては——即ち対象が此の先入見に従うのであるという事を想定するならば——許されるであらうとするに至らしめた。随つて此の想定を吾々もなさねばならないと言う。カントは言う、従来人は吾々の認識が物に従うのであると想定して来た、が今や吾々はそれに反し、物が吾々の認識に従うのであると想定する。従来 of 想定に従えば懷疑説は超克できなかった。然るに今や、先天綜合判断を基礎として懷疑説の攻撃に打勝つて之を撃退する事ができる、と。

若し万一此の兩つの想定の中古い方が唯一自然的な主張であり、新しい方はそれに反して反自然的に大胆な主張であると思われる、という事さえないとするならば、カントの主張はすべて寔に結構な事であるであらう。

然るにカントは、吾々の研究の關係する対象の一部即ち経験の対象の全部は現象であり、且つ又現象として吾々の主観性に依つて制約されて居ると指摘して、上述の主張を一層真実らしくしようとして居る。此の故に吾々の先天綜合認識は対象の此の部分に対してのみ妥当するものであり、之を超え、随つて又可能的経験の領域を超えては、單に所謂知識は不可能である、と彼は言う。斯くてカントに従えば畢竟、ヒュームに於ける如く、神、不死、自由、宇宙の起源又は無始、有限又は無限、等々に關しての最も崇高な研究はなくなる。茲に於て人間の情意が如何に認

識を渴望しても、之等の事に關して人は全く知識を獲る事ができないのである。

かくして之は差当り、懷疑說からその獲物を奪い取らんとする努力に於ては、甚だ部分的ではあるが、成果を収めたものであった、——但しそれは、若しそれが苟くも成果であるとするならば、というのである。というのは、本来は、それが成果である等という事は直ちに否定さるべき事であるからである。吾々にとつて現象である所の対象は、無論その特性が吾々の主觀性に依つて何等かの仕方で同時に規定されて居るではあろう、然しその故に吾々の抱いて居る何等かの盲目的先入見が、対象の経過に關して、その真なる事を確証されるという事は、以上に依つては未だ決して証明されて居ないのである。若し吾々が、その事は証明されて居ると無造作に承認するならば、それは論理的に許し難い事柄であり、そして吾々が此の承認の上に或る學問を建設しようとするならば、原理は恣意的に樹てられて居るといふ懷疑論者の古い非難は、吾々の態度に對し完全に適中するのである。

然るにカントは己れの説の此の弱点を自覺しない。彼をして懸念せしめるのは、現象的な知の確保に對する疑いではなくして認識の至高至善の部分を懷疑論者達に委ねてしまわねばならなかつたという意識である。即ちそこで彼は実に別種の代用物を案出したのである。先天綜合認識が吾々の盲目的に信ぜざるを得ぬものであるならば、神の存在は、又靈魂の不滅は、又意志の自由

は、吾々の盲目的に信すべきものである。それ等は純粹実践理性の要請なのである。それ等の眞理性に対する洞察は吾々は全く有つては居ない。けれ共、そうであるからと云つてそれ等に対する吾々の確信がより信賴し難いというわけはあり得ない、即ち私は此の確信を、私自身の道德的尊嚴に対すると同等の力を以て固執しよう。以上の如くにして實にカントは、これ等の崇高な理念の客觀的實在性に関してさえも猶お、吾々に確實性を与えたと自惚れて居るのである。

併し乍ら、ニコラウス・クザーヌスがその“Intellectus”、「知的洞觀」に概念せられ得ぬ概念作用を認めた様に、吾々は、カントは不当にもその「実践理性」に対し信ぜられ得ぬ信を期待して居る、と言ひ得る、と私には思われる。彼に在つて懷疑說反擊の手段として用いられて居るものは、衰微の第二段に対する反動期に於て常に然る慣いである様に、すべて甚だしく反自然的に歪められて居る。

然もドイツに於ける此の反動は、漸く緒についた所であつた。慎重なイギリス人達は、リードの進んだ不自然な道を更に承けて行く事をして居ない、のみならずスコットランド学派自身に於てさえ、既にリードの第二の後継者たるトーマス・ブラウン【Brown:1778-1820】<sup>(四)</sup>は、立ち帰つて再び自然的な見方に近づいて居るのである。然るにドイツに於てはそれに反してフィヒテ【Fichte:1762-1814】<sup>(五)</sup>はその正反合の方法を以てカントに継ぎ、シェリング【Schelling:1775-1854】<sup>(五)</sup>

はその知的直観即ち全く絶対的な認識法を以てフィヒテに繼いで居るのである。此の方法は了解され得ぬものであり、且つ又何故に哲学は不可能な事を特に顧みる義務を負うべきかも理解できぬ事である、然り！常識的知識からの斯くの如き方法への通路は、どうしても其処へは行けない様に、これを鎖すべきなのである。而して又ヘーゲルは【Hegel:1770-1831】（五）、その絶対哲学——即ち、すべての真理を知り、自然及び精神としての全世界を自らの裡から再産出する思想なりと已れ【*nicht selbst*】を主張するそれ——を以てシェリングに繼いで居る。ヘーゲルは全然無内容な思惟から出発しようと欲し、否定を以て弁証法的進行の車輛としようと欲し、而して定立、否定、及び両者の統一という八分三拍子で行われる一聯の舞踏の足どりを踏んで、それである高い目的に到達したものと信じて居るのである。

一六 扱所が！此のヘーゲルの体系と他の僭越とは裁かれて居る。それは数十年以前には猶お一般に、人間研究力の最高の業績として賞揚されたのであるが、併し今日では、当時と同様な程度に一般に、人間の思索の極度の墮落として排斥されるのである。これはよき徴候である。かくて要するに吾々は、吾々の時代は発展の新時期の初頭をなすものであると確信して好いのである。以上の、体系として最近なるものの空虚なる事の確信と自然的に結び付いてより古い思想家達に迄立帰って、恰も中世がアリストテレスに於て見出した様な、より有利な結合点を得ようとする

る試みがある。此の探索に當つて人々は先ずカントに復帰し、彼に於て謂わば「近代のアリストテレス」を認められると考えて居る。吾々の歴史觀察の示す所に依れば、この考えは當つて居ない。カントに先行するものも、彼自らの説く所も又彼に繼起するものも、古代に於てかの古えのスタ

いにし

ガイラ人「アリストテレス」の占めた如き位置は、如何にしても彼には与えて居ないのである。

ヘルバルトは言う、「成程カントは、人々が火を点じ得た所の火花を打出しはした、併し彼の遺産は銘酹者流の手に歸した」と。斯くて彼は実に、カントの直後、以前の何時よりも事情は一層悪化した事を承認して居るのである。けれ共、仰も【抑々】何故に【Aber warum】カントの後、すべての人が酹酹したのであるうか、と私は問おう。第一人者たる或人が正道を指示した直後に、すべての人が、而も彼の影響の結果、以前よりも一層の邪路に陥つたという事は、学問の歴史上未聞の事ではなからうか。

吾々は此の及び多くの他の確実な論議に對し、現代の輿論に依つて迷わされていいであらうか。——決して然らず！若し、現代は哲学上若返つたと賞し得るとすれば、それは同時に又、現代は何よりも先ず新しい小児期に入つたと言つて居るものである。それ故にこそ現代の判断は、事実何等しつかりした確実性をもち得ないのである。そして現代の輿論は、その輕躁な動搖に依つて、種々己れ自身への反証を示して居るのである。現代は、昨日はショーペンハウエルの如き人

の倫理上の同情説に従つたのに、今日はニーチエの不人情な超人主義を尊敬して、前説を輕蔑して居るではないか。かくして實にカントに關しても亦、最も優れた人々の若干は今日既に通説からは全く解放されてしまつた。最も尊敬されて居る人々の中唯一人丈けを挙げるならば、例えばハーバート・スペンサー [Spencer: 1820-1903] の如きは、カントに就いて私自身と全く同一に考えて居り、そして又吾々は此の同一な考えを、御互に全く独立に有つて居るのである。カントに關する私の判断を聞かされた學者達が次の如く叫ぶのに、私は一再ならず出会つたのであつた。即ち、「<sup>ああ</sup>吁！それを貴君から聞く事は、私の如何に喜ばしい事であろう！それは亦全く私の確信でもある。けれ共吾々は、それを發表してはならないのである」と。斯くの如き人怖じを私は見た事がない。寧ろ私は、現代に取つて斯くも重要な問題に就いては、自己の偽らざる見解を公然と吐露する事が、學問上の義務であると考えるのである。

カントに復歸して哲學を更に進めて行こうという試みが、何等の成果をも収めなかつた事を見るのも亦、教える所が多い。而して又、カントを選んで宗とする人々が、それにも拘わらず、同時に又カントに於て差別を行わねばならぬ事を告白せざるを得ぬと認めて居るのを見るのも之亦、教える所が多い。彼等は或る著作、殊に『純粹理性批判』は称揚するが、併しそれに反し他の著作、殊に『實踐理性批判』の方は排斥して居る。シヨーパーンハウエルもそうであり、——既

に述べた如く——我がロルムも亦そうである。彼等は、単にカント以外の人々が、カントに依つて正道を指示された後、全く邪路に迷い入ってしまったと言う許りでなく、カント自身も彼が正道を発見するや否や、直ちに全くの邪路に踏み入ってしまったのであると主張する。これ程奇怪に思われる事はないではないか。

然もこれのみに止まらない！『純粹理性批判』からも亦広汎な部分が、根拠なく且つ価値なきものとして、捨て去られる。が併し人々は、カントの学説を種々様々にして篩ふるい落した後で、唯一つ残存する所の意義を認める、その諸部分に就いても、猶且つ最後には、それは或る変様を必要とすると言くのである。かくして人々はそれ等の部分を、近代自然科学の到達した或る見解意見、例えば、ヨハンネス・ミュラー【Müller:1801-1858】の特殊神経エネルギー説や、ヘッケル【Haeckel:1834-1919】及び其他のダーウイン主義者達の採つた如き表象及び判断遺伝の憶説、デュボア・レーモン【du Bois-Reymond:1818-1896】の自然認識の限界の説や、と同一視する。ロルムの態度も亦此の外に出でないのである。

然るに、少しく精密に研究するならば、人々が斯く本質上同一であると説く点も、実は何等より深き親近性を有つて居ないという事が、わかるのである。特殊エネルギーに就いてのミュラーの説は、時間空間なる先天的感覚形式のカントの説とは無関係であつて、寧ろそれは、ロック及



び他のより古い経験論者達の、感覺性質の主観性に就いての説と關係するものなのである。(五三)  
想念遺伝に就いてのヘッケル及びその他のダーウイン主義者達の説は——序<sup>ついで</sup>に言うならば、此の説は如何なる経験にも全然反するものである——、カントの先天的な概念及び認識とは無關係である。蓋し後者は、カントの考えに依れば、全く如何なる経験からも、それ故又吾々の祖先の経験からも、汲み取つて来られ得ない性質のものであるからである。最後にデュボア・レーモンの説は、カントの、物自体の不可認識性及び超越的問題に対する先天的合認識の不可適用性の説とは、無關係である。但し例えば、人間の認識には或る限界があるという事は両者共に説く所であるという様な点は例外である。けれ共、此の事は古い経験学派も亦説いた事であり、且つ又それに就いて心理学的觀察を基礎として、一聯の該切な規定を与えたのであつた。(五四) 然るに人々は、これ等の先人達に就いては、概して殆ど知る所がない。そしてその為めに人々は、実はカントが他から取り入れて、而も唯、多くの場合、種々のものを附加する事に依つて不純化したに過ぎないものを、カントの独創的功績として屢々算えて居る。かくて人々は屢々又、自然研究と哲学との調和を樹立したのはカントが最初である、とも思つて居る。けれ共事實は之に反し、ラボアジエが化学に対し基礎を置いた、有名なその著書に於て、正しき研究法に就いてのコンディヤック【Condillac, 1715-80】の長い詳論を引用して自分は自分自身の研究に當つて、此の方法を遵守

して、それが全然確實なる事を覺つた、と言つて居る<sup>(五五)</sup>通り、それ程に迄自然研究と哲学との両者は既に調和して居たのである。

それ故、本来の且つ真正の源泉に帰れ！吾々は向上的發展段階の業績に結び付こう！其処に吾々は、優れたる準備的労作を見出すであろう。其処に亦吾々は、吾々が此の研究を成功的に行する事を可能ならしめる、あの健全な方法をも、見出すであろう。

一七 より古い時期の向上段階の業績に就いても、同様の事が言われ得る。かく言う場合私は、特に古代哲学の業績を念頭に置いて居る。古代哲学は近世に此して、その向上發展の期間が一層長かつたという長所を有つて居た、そしてそれ故に、多くの点から見ても、一層豊富な成果を収め得た。アリストテレスからは、今日と雖も<sup>いまだ</sup>猶お、実に多くの事を最もよく学び得るのである。

中世に就いて言えば、それは如何に——既にライブニッツの認めた通り<sup>(五六)</sup>——顧慮する価値があるとはいへ、古代近世の両者とは、同等の価値を有つては居ない。中世に於ては、本来をいへば、理性的研究に対する全く自由な関心というものは、決してなかつたのである。哲学は“*ancilla theologiae*”（「神学の下婢」）と見做された。それ故此の期の第一段階に就いて、當時は理論的関心が純粹であつたというのは、単に相対的に言われ得るに過ぎないのである。此の事情は、發展を阻止し、向上期に於て重要な諸研究を妨げ、そして衰退の第一段の特性なる無意味

な小理窟への墮落を促進したという事は疑いを容れない。それ故中世哲学を顧慮しても、他の時期と同等な裨益<sup>ひえき</sup>を得る事はできない。のみならず若し人が、哲学を再びあの神学への奴隷關係へ引き戻そうとする点で、中世哲学を範としたならば、中世哲学はまさしく害禍を与えるものとなるであらう。(五七)

一八 併し現代は、啻<sup>ただ</sup>に近世及び古代の哲学史中に結合点を求むべきのみではなく、他諸科学の業績に於ても、特に、現今甚だ有力な發展を遂げつつある数学及び自然科学の業績に於ても、亦その結合点を求むべきである。學問に於ては、無論すべての事が相聯關して居る。それ故吾々は、偉大な数学者や自然科学者の業績の裡に哲学そのものに対してさえも本質的な寄与のあるのを見出すのである。その唯一つ丈けに就いて言及してみるならば、公算論【Wahrscheinlichkeitslehre 確率論】の完成は或る論理的問題を或る仕方で解いたのであつて、それに依つてヒュームの懷疑的懸念は完全に取り除かれ得る、否事實取り除かれてしまったのである。リード及びカントが、それに訴えざるを得ぬと信じた例のあの不自然な手段は、此の場合何等の役にも立たないのである。

一九 上述の結果としてカントが、吾々を知的洞觀の門を通して導き入れようとせずして、或る極めて奇異な仕方、即ち盲目的信というあの信ずべからざる作用に依つて、吾々を闖入<sup>わづらひ</sup>せしめようとした所の、あのより高き領域への途は最早、以前そう見えた様に、閉塞<sup>へいそく</sup>されては居ない

のである。吾々の認識作用には事実限界が存して居り、又永遠に存するであろう、という事は真である。多くの問題に於て吾々は、単に蓋然性のみを獲得し得るに過ぎぬのであり、他の問題に於ては此の蓋然性をさえ、多量には獲得する事ができないのである。ではあるが併し、仮令吾々の知識は悉く断片的のものであるとしても、然も確かに此の断片的なもの丈で既に或る巨大なるものである。人間は世に生けるものの最も力あるものと、ソフォクレスは言つて居る。そして学こそはゲーテの語を藉りるならば、「人間最高の力」である。此の力は既に屢々人間を、人間自身がその最も大胆な夢想に於て希望した所以上に、導いて行つた。それ故此の現象は、あの最高の問題に就いても亦現れるであろう。

吾々は物質の本質を識らず共、然も物質の本質的に不滅なる事を知つた。同様に吾々は、精神の本質を識らず共然も、精神が永生の望みを有つ事は十分根拠ある事であるという事は、恐らく示し得るであろう。そして又吾々は、世界の根原の本質を識らず共然も、世界は此の根原に依つて、最も善く組織されて居る、という理性的確信には到達するであろう。そこでそれに依つて、心情にも亦真に満足を与える如き、最善観問題の解決が得られるであろう。

わがロルムが、シヨーペンハウエルやハルトマンの如き人々の提出した最悪観的抗議が如何なる学的価値をも欠如する事を認めて居るのは正当である。即ち前者の如き人々は妄誕なる【absunder

ばかげた】形而上学に立脚するものであり、後者の如き人々は、それ自身として観て嫌わしい【missliebig】と言わざるを得ぬ事件を、皮相的に偏頗に算え挙げる事に立脚するものである。ロルムに依つて唯だ一つ学的なる最悪観として許されるのは、人間的知的要求とその要求を満足さすべき人間の力との間の痛ましき乖離——即ちカントの『純粹理性批判』の結論として現れる如く見えた様なそれ——である。かくて上の抗議も亦破れたのである。

二〇 扱無論未だ、別の、そして恐らくは一層重要な抗議が残つて居る。

従来人々は生物界には反目的論が在り、無生物界には如何なる目的論的性格もない、と論じて来た。所が！其処に於ても、研究の進歩に依つてすべての事が逆に顛倒されて居る。現代最も有名な生物学者ハックスレイ【Huxley:1825-95】は進化論に関して、ダーウィンの立場に立ち乍ら然も、恰も最近偉大なるエルンスト・フォン・バエール【Baer:1792-1876】<sup>(五九)</sup>の爲した如く、又、今【十九】世紀の初頭に於て全進化論運動の魁となつたフマルク【Lamarck:1744-1829】<sup>(六〇)</sup>の爲した如く、世界はその根本素質に於て目的論的性格を帯びて居ると思われると声明して居る。然りとすればこれは、生物と無生物とを等しく包括する目的論的性格の謂なのである。

その他尚お別の抗議が起る。例えば、創造の必然的被制限性を引証するもの<sup>(六一)</sup>、空間の次元の少数性を引証するもの<sup>(六二)</sup>、地球及びその他の或いは生物の住んで居るかも知れぬ天体の破

滅の切迫を引証するもの、或いは、エントロピーの法則を、及び又自然の過程のすべての形式の、乃至は少なく共比較的高級の形式の、停止する恐れを、引証するもの（六三）、等がそれである。更に又他の抗議は、すべてのそれ自身に見て悪しきものを、弁論が欲するに違いない如く（六四）、純粹に消極的なもの乃至は又自体としては善き要素の結合の結果起きるにすぎないものと解しようとする時に、生ずる所の難点を、力説する。此の場合には研究は、範疇論の極めて細緻な考察へ入って行く。

人は、最善観問題は極めて種々なる方向へ多岐に分岐して錯雑せるものである事を覚るであらう。併し此の難問の網に於て出会うすべての結目の中、解き得ぬものは一つもない。のみならず此の解決には、又必ず同時に、新らしく且つ想いがけぬ利益の発見が結び付いて居る。何故ならば、古代の最善論者ヘラクレイトスの言葉「見得ざる調和は見得らるる調和より麗し」は、その真なる事を証されるからである。

歴史の教うる如く全く最善観的な思想を抱いて居た所の、向上発展段階の最大思想家達、即ちプラトン及びアリストテレス並びにアウグスティヌス及びトマス・アクィナス、並びに又デカルト、ロック及びライブニッツ等は、その点に、吾々の感謝に値する実に多くの仕事を致した、そして、ロルムの敢えて為した如く、彼等の最善観的論議を、わが最近の流行哲学者達の最悪観

的論議と同列に置く事は、絶対に不当である。所であの思想家達が為すべく後世に残して行つた事は、——吾々は確かに希望して差<sup>つか</sup>聞えないと思うが——、吾々或いは吾々の後に来る人々に依つて為されるであらう。

二一 如何なる知も、その領域内に於て、何等か或る自由と救済とを齎<sup>もたら</sup>すものである。此の事は吾々が此の世に於て惡と感ずるものに就いて、心情を満足せしめる如き仕方<sup>は</sup>で、弁明を与える所の知には、他の如何なる知にも増してよく当て嵌<sup>はま</sup>るであらう。何故ならば、最惡觀的憂慮は、人間を苦しめる最も悲しむべき夢魔であるからである。

全能にして且つ大慈大悲なる万人の父という事をその教理とする吾々の民族的宗教〔基督教〕は、最善觀的宗教である。そして唯その故にのみ、又最善觀なる旗印の下にのみ、該宗教は世界を、——私の思う所に依れば——世界史の本来の支持者となり來つたその部分の人間を己れの味方として來たのである。所が、該宗教はその部分の人間を永遠に味方としたのではないという兆候の現れて居るのは確かである。けれ共、假令此の壮大極まる文化現象が消失する様な事があるとしても、その事の起きた結果としてその位置が空虚の儘放置されるという事はないであらう、況<sup>ま</sup>してその位置が最惡觀的世界觀に依つて補われる等という事は一層ないのであらう。然らずして、永遠に此の位置を征服する唯一のものは、基督教が原罪及び代理贖罪の教理に依つて為し得たよ

りも一層よく世の悪を弁明する所の、<sup>i</sup> された最善観であるであらう。此の革命は、当時基督教自身が惹き起した革命と同様のものであるであらう。当時まで人々が宗教の本質であると考えて来たモーゼの律法は全部倒れた、所が、其の本質は依然として保護されて居り、又純化され浄化されて現れて居たのである。同様に又、当座は本質的と思われる多くのものも、再び倒れないとは言えなであらう、——そして私は、かく言う事に就いて多くの品位ある人が、恰も嘗て割礼に好意を持てる多くの賛成者達がパウロを怒つた如く、私を怒るという事を知つて居乍ら、猶お私はこの事を言うのである——、けれ共シラーの所謂信の三つの言葉〔*Die Worte des Glaubens*〕と題する自由、靈魂の不滅、神の存在なる三つの要請に倣つて、<sup>ii</sup> 自由、神なる「三つの言葉」を挙げてこれを讃美している。〕は、その故にこそ心情の裡に益々力強く響く様になり、内的及び外的の生活を創造的に、善く秩序づけるであらう。

神よ守らせ給え！然り——余は信ず——神は守り給うであらう。

- i 底本四二頁の一行目の行頭が2字欠落している。「geläuteter Optimismus」「純化された」であらうか。
- ii 「純化され浄化されて」「gereinigt und verklärt」は、「浄化され変容されて」ではないか？



## 注

(一) Hieronymus Lorm, *Der grundlose Optimismus*. Ein Buch der Betrachtung. Wien, Verlag der Literarischen Gesellschaft, 1894.

(二) 会則第三条に言う、「本協会は、文芸書及び一般的興味ある學術的勞作を公刊す。」と。該協会成立の第一年（一八九四年）に、該協会の出版した著書には、文芸書三部、學術書一部、が在る。後者は即ち吾々が今語つて居る哲学書である。

(三) 講演の際には、此の後に続いて、次の語句があつた。「のみならず又私は、二十年以前私を親切に迎え、爾來<sup>じらい</sup>私に幾多の厚意を示して下さつたわが親愛なるウィーン人諸君に向つて、再び御話する機会には恐らくないだろうと思ひます。当大学に於ける私の活動は、ターツフェ内閣の下にあつて、堪うべからざる程減殺されました、然るに、ホーヘンブルト内閣——と云いますのは勿論、ホーヘンブルトの勢力下に組閣されましたギンディッシュュグレッツ内閣を指すのでありますが——の下に於ては、事情は猶お一層遙かに悪化致しました。フォン・マダイスキー氏は、多年の尽力に依つて一つの内閣の下に於て獲得した要求は、内閣の更迭に當つて消失すべからざるものであらうという私の考えに對して、此の意見には賛成し難き旨を聲明されたのであります。斯くて私は

無論、より以上の自由を許す空気を吸う事を切望して居るのであります。それ故今日私の講演は、

ウィーンのが友人諸君と最後の会食をなすべき、袂別の宴と見做しても差支えありません。」この語句は会衆に依つて麻痺的な沈黙を以て聴き取られたのであるが、次いで公けに猛烈な運動を惹き超したのであつた。私自身も終に、「Neue Freie Presse」紙に一聯の論説（一八九四年十二月二、五、八、十五、十八、日）を掲げて、私に加えられた不正を明示し、以て上の語句を補説するの得策なるを覺つた。これ等の経緯は本講演の主題とは無関係である故、印刷に當つて私は此の趣意の陳述を割愛した。今私は此の注に於てその陳述の場所を与えるのであるが、それは、本講演を聴いた者が誰も、あの割愛を訝<sup>いぶ</sup>かしく思うとか、或いは恐らく加<sup>しかのみならず</sup>之、該講演に於て私が何か怪しからぬ事を言つたと私自身思つて居る等と想わせられるに至るとか、そういう事のなからんが為めなのである。

(四) a. a. O. S. 328.

(五) Antoine-Laurent Lavoisier, *Traité élémentaire de chimie*. Paris 1789. T. I. Discours préliminaire. Paris 1789. p. VIII

(六) 一八九四年二月十一日の「Neue Freie Presse」紙に公表された書簡の一つに於て。

(七) Theodor Gomperz, *Griechische Denker. Eine Geschichte der antiken Philosophie*. Leipzig 1891.

(八) タレス(前六四〇年頃生)からアリストテレス(前三三二年歿)まで。

(九) 前三〇八年頃ツェノン【キプロス生まれのゼノン】に依つて創立さる。ストア学説はクリュシッポス(前二八二—二〇九)に依つて立派な完成を見た。

(一〇) エピクロスの生涯は前三四一年より二七〇年まで。

(一一) テイトウス・ルクレティウス・カルス、前九五—五二。

(一二) 新乃至第三アカデミーの創設者カルネアデス、前二四—一二九アテネ居住。

(一三) アイネシデモスは基督出生の頃アレクサンドリアに於て教えて居た。【生没年不詳】

(一四) 吾々はアグリッパ【同姓の者は多数居るが、ピュロン派の哲学者】の年代は唯不精確に推定できると過ぎない。何れにしても彼はアイネシデモスとセクストス・エンペイリコスとの間に在る。

(一五) セクストス・エンペイリコスは後二〇〇年頃全盛であつた。【生没年不詳だが、二—三世紀頃、著作は残っており、和訳もある。】

(一六) マルクス・トウリウス・キケロ、前一〇六—四三。

(一七) 猶太人フィロンは後第一世紀の中葉迄アレクサンドリアに存命した。

(一八) 新ピュタゴラス学派の最も優れた代表者の中には、ネロ帝治世にはテュアナのアポロニオス及びガデス生れのモデラトスがあり、アントニウス時代の前にはゲラサ生れのニコマコスがあつた。

(一九) アンモニオス・サツカス、約<sup>およ</sup>後一七五——二五〇。

(二〇) プロティノス、後二〇五——二七〇。

(二一) ポルフュリオス、後二三三——略<sup>おぼ</sup>三〇四。

(二二) ヤンブリコス、コンスタンティヌス大帝治世に歿。

(二三) プロクロス、後四一一——四八五。

(二四) アレクサンデル・ハレシウス、アリストテレスの全学説を識れる最初のスコラ学者（以前は論理学の著作が知られて居たにすぎなかった）、一二四五年歿。

(二五) トマス・アクィナス、一二二七——一二七四。

(二六) ヨハネス・ドゥナス・スコトゥス、一二七四——一三〇八。

(二七) 何が事実的相違であり、何が概念的相違であるかは容易に了解できる。常に存在し且つその際一が他なる事が正当に否定され得るもの、それが事実的に相違するものである。それに反して、常に存在し且つそれに就いて一の概念が他の概念なる事が正当に否定され得るもの、それが概念的に相違するものである。二人の個人は事実的に相違する、音楽家と画家とは概念的に相違する。

それ故人は、概念的には相違して居るものが、事実的には一つであり得るという事、例えば或る音楽家は或いは同時に画家でもあるであろう、という事を容易に認めるであろう。けれ共又事実

的に相違して居るものが概念的には一つであり得る、という事も亦同様に明らかである。例えば、ビスマルクとカプリヴィ [Graf. Georg Leo Caprivi. 一八三一—一九九、ドイツの軍人にして政治家、総理大臣たりしことあり。] とは、政治家としては同一の概念に属する如きである。それ故、概念的區別に比して事實的區別の方を一層広い區別であると称するのは、全然不適當である。一は他を包含するのではなくして、両者は寧ろ全く異種類である。若しそれ両者の間へ、中間の広さを有つ區別として、「形式的」區別を挿入しようとするに至つては、實に一層の不条理である。

スコトゥスは彼の形式的區別を、神學最高の秘義に適用した。例えば、三つの神格は事實的に相違して居るのではなく、併し又單に概念的に相違して居るのでもなく、互に形式的に相違して居るのである、と言つたのである。既に述べた様に、形式的區別なるものは、本當は理解されないのであるから、上の如き主張に於てさえも、正統説<sup>i</sup>に対する矛盾を証示する事は、無論できないのである。

(二八) *magister abstractionum* なる尊称を有つたフランチスキス・マイローは、一三二五年に歿した。ソルボンヌ大論判、即ち夏期毎週の論議——此の論議の時、既に述べた様に論者は終日（朝六時から夕刻六時まで）あらゆる手当り次第の討論をやり散らさねばならなかつた——の行われたのは、

i キリスト教の正統な教義ということであろう、三位一体とか。

一三二五年の事である。

(二九) 十四世紀唯名論の優れた創立者ウィリアム・オッカムは、バイエルン人ルドギッヒ——此の人のために彼は法王位に反抗して戦った——の治世に一三四三年（一説には一三四七年）ミュンヘンに歿した。

(三〇) 説教者兄弟団 [O. P. - Ordo fratrum Praedicatorum] のマイステル・エックハルト、一三二七年歿。

(三一) 説教者兄弟団のヨハンネス・タウレル、一三六一年歿。

(三二) 説教者兄弟団のハインリッヒ・スーズ、教会に依つて聖列に加えられる、一三六五年歿。

(三三) ヤン・ファン・ロイスブルク、一三八一年歿。

(三四) 『独逸神学』の筆者は未詳。【匿名で著されたが、ルターが改めて刊行した、と言う意。】

(三五) 巴里大学総長ジャン・ジェルソン、一三六三——一四二九。

(三六) ライムンドウス・ルルス一二三五——。彼の説が羅馬法王に依つて罰せられた最初は一三七六年。

【Ramon Llull ラモン・リュイ】

(三七) ニコラウス・クザーヌス（トリエルの近くなるクエス生れのニコラウス・クリップフス [Nikolaus Cypf in Kues]）、ブリクゼンの司教、一四〇一——一四六四。

(三八) ニコラウス・クザーヌスは此の反対者一致の法則 [Gesetz des Zusammenfallens der Gegensätze] を、

数学の例に依つて説明して居る。真直なものと湾曲したもの、例えば直線と円とは、互いに反対である、けれ共無限大の円は——彼の言う所に依れば——無限の直線である。鈍角は鋭角と反対である、けれ共、鋭角の極度と鈍角の極度とは——彼は言う——両者に在つて二辺は一直線をなす故、一にして同一である。

(三九) クザーヌスの思想圈とヘーゲルのそれとの間には両者を隔つ深い溝渠が在るにも拘わらず、クザーヌスの体系の三部分とヘーゲルのそれとの間に或る類比の在る事は見逃せない。後者に於ても、前者に於けると同様、第三の部分は前二部分の統一をなして居ると思われる。ヘーゲルが矛盾律をそれと反対のものへ顛倒して居るやり方、彼がその思弁的方法に當つて否定に課して居る役目、を想いみよ。

(四〇) ヴェルラムのベーコン【Bacon von Verulam】(一五六一——一六二六)、デカルト(一五九六——一六五〇)。多くの人は此の場合ガリレイ(一五六四——一六四二)をも挙げる。けれ共彼は、本當の意味では、哲学の範圍では影響を及ぼしては居ないと私には思われる。蓋し恐らくこれは唯、イタリア人は一般に初期の哲学運動には殆ど参加しなかつたからに過ぎないであらう。がそれは兎に角として、各々の新しい哲学時期の初頭の性格を示すために私の述べた事は、ガリレイを顧慮しても決してその明確さを減じないであらう事は明白である。

(四一) ジョン・ロック (一六三二——一七〇四)、今日迄屢々、分析心理学の優れた設立者として尊敬されて居る。

(四二) ゴットフリート・ヴィルヘルム・フォン・ライプニッツ (一六四六——一七二六)。

(四三) ヴオルテール (一六九四——一七七八) は主として、ロックの説をフランスの土壌へ移植した人。

(四四) クリステイアン・ヴォルフ (一六七九——一七五四) に就いては勿論人は、彼はライプニッツ哲学を稀薄にしたと言い得られる。彼の学派はドイツ啓蒙時代に優勢であつた。レッシング (一七二九——一七八一) は本質的には唯三位一体説を転釈した点に就いてのみ己れのスピノーザ主義者たる事を告白したが、併しその他の点に於てはその哲学上の意見に於て、多くライプニッツに従つた、という事は今日では既定の事である。

(四五) David Hume, *Enquiry [Inquiry] concerning human understanding*, Sect. 1. ["*An Enquiry Concerning Human Understanding*"]

(四六) 古代に於けると同様近世に於ても亦、懷疑主義と相並んで、或る懷疑的不安をその特性とした折衷主義が現れた。

(四七) デイビット・ヒューム 一七一——一七七六。

(四八) トーマス・リード (一七一〇——一七九六) は所謂スコットランド学派の一聯の哲学者達の



先達をなして居る。彼の後には、デウガルド・スチュワート【Digard Stewart】（一七五三——一八二八）、トーマス・ブラウン（一七七八——一八二〇）及びサー・ウィリアム・ハミルトン（一七八八——一八五六）等が最も重要であつた。

（四九）インマヌエル・カント一七二四——一八〇四。

（五〇）ヨハン・ゴットリープ・フィヒテ一七六二——一八一四。

（五一）フリードリッヒ・ヴィルヘルム・ヨゼフ・フォン・シェリング一七七五——一八五四。

（五二）ゲオルグ・ヴィルヘルム・フリードリッヒ・ヘーゲル一七七〇——一八三一。ヘーゲルはシェリングに較べて、年齢からいえば先であつたが、併し最も主要な著作の上からいえば後であつた。

（五三）ヨハンネス・ミュラー以前既にトーマス・ヤング【Thomas Young, 1773-1829】は、光学の範圍に於て、特殊神経エネルギーの仮説を樹立した。のみならず彼は其の場合、ミエラー以上に徹底的にその仮説を完成した。併しドイツ哲学の影響は、ヤングに於ては完全に除かれて居る様に思われる。

（五四）例えばLocke, *An essay concerning human understanding*. IV. chap. 3. 参看。

（五五）Lavoisier, *Traité élémentaire de chimie*. Paris 1789. T. I. Discours préliminaire pp. V et XXXI.

（五六）ライブニッツは言う、「自分は知つて居る、スコラ学者達の諸著は妄誕に充ちては居る、けれ共此の藁の下には黄金が蔵されて居る。」と。

(五七) 講演ではこの処の後に、オースタリーの文部大臣に関する若干の文句があつた。大学報告の報

ずる所に依れば、文部大臣はわが学部<sup>の</sup>提案を無視して、(疑いもなくわが学部<sup>の</sup>意思に全然反した処置を執らんとする極めて明白な意嚮<sup>いこう</sup>を以て) ブレスラウの公爵僧正学校の試験員なる或るスコラの哲学者を、十四年来私のために留保されて居たウィーン大学の正講座に据えようと試みた由である。序説部の或る注(注(三) 参照)と同様の理由に基づいて、私は講演の際口述した此の部分をも亦、印刷に当って削除した。

(五八) Thomas Huxley, The Problems of Geology IV, 其処で彼はヘッケルを論難して居る。ドイツのダーウイン主義者達の中で、特にヴァイスマン【August Weismann, 1834-1914】は宇宙の目的論的基礎の必須なる事を断然強調して居る。

(五九) Karl Ernst v. Baer, *Studien aus dem Gebiete der Naturwissenschaften*. 2. Ausg. Braunschweig 1886. II, IV u. V.

(六〇) Jean-Baptiste Pierr Antoine De Monet De Lamarck, *Philosophie Zoologique*, 1819

(六一) この解決は如何むる方向に求むべきか、嘗て私は此の事を数行の詩句を以て言い現そうと試みた。

可能なる世界の中最も善き世界

汝は言う、「此の世界は最善の世界に違いない、

何故ならば最善者は創造に際し最善のものを選ぶから」と。

他の者は言う、「否！此の世界は最善の世界ではない、

でなければ此の世界は神の力の極限となるではないか」と。

斯く相争う汝等二人よ、乞う聞け、

抑も世界は在るのであるか——否！それは生成しつつ

あらゆる善きものの極限を踏み越える、そしてそれ、は無限に遠く、

類似から類似へと追求して行く、

到達し難く高き主の御像へと。

(一八九二年 Wiener Almanach 所載)

(六二) 斯くの如き疑念を避けるため、吾々の経験範囲の外に猶お、下空間及び上空間（此の様な用語が許され得るならば）が存立し、且つそれ等は任意の次元をもつて存立するであろう、という事を人々が引証するという事はあり得る事である。スピノーザと難も猶お彼の所謂実体に、（無次元の）思惟と（三次元的）拡がりという経験に入つて来る二つの属性以外に、猶お他の無数の属性をも歸する事を躊躇しなかつたではないか。が併しかくする事は、早速新しい困難へ導くに過ぎない、

そして今や世界全体を——アリストテレスの適切な用語に従えば——拙劣な悲劇の如く単なる聯絡なき挿話に分裂せしめる（『形而上学』第十四篇、第三章、一〇九〇、B一九）危険に迫られるのである。此の抗議は一体結局如何にしてその解決を見出すであろうかという事を、吾々今此処で示そうとするならば、それは余りに余事に涉り過ぎる事であろう。

（六三）此の点に関しては、例えばヘルムホルツ【Hermann von Helmholtz, 1821-94】の通俗講演、一八五四年の「自然力の相互作用に就いて」【*Ueber die Wechselwirkung der Naturkräfte*】、一八七一年の「太陽系の成立に就いて」【*Ueber die Entstehung des Planetensystems*】を参照。

（六四）アウグステイヌス及びトマス・アクイナスは既に此の事を認めた。

（六五）ソクラテスが最高の畏敬を表したイオニアの聡明なる自然哲学者エフェソスの人ヘラクレイトスは紀元前五〇〇年頃全盛であった。

カナ置き換え.. ギーン↓ウィーン、ラヂアジエ↓ラボアジエ、エピクウロス↓エピクロス、キリアム↓ウィリアム、ギルヘルム↓ヴィルヘルム、エルラム↓ヴェルラム、ディギッド↓デイビット、ダーキン↓ダーウィン、シルレル↓シラー、ベイコン↓ベーコン、ドルテール↓ヴォルテール、ドルフ↓ヴォルフ、ヴァイスマン↓ヴァイスマン

底本：池上鎌三訳『哲学の四段階と斯学の現況』岩波書店 1930.6.5  
作成者：石井彰文

作成日：2025.12.30